結草
kusamusubi
publishing house:moriyama 2-19-32 Kanazawa
Jodo Shinsyu Jhokoji phone 076-252-4922
www.jhokoji.net/ info@jhokoji.net 2012.01.17

「聞」老病死を見て、世の非常を悟る

道因寺住職　相馬　豊

おはようございます。今日ですが、昨日も「聞」ということで一貫しておるのですけれども、「真宗の教えを聞く」とこういうふうにいわれましても、自分もそうなのですが、私たちは、その中で「一体どう聞いていけばいいのだろうか」、「何を聞いていけばいいのだろうか」、「聞いてどうなっていくのだろうか」、聞けば聞くほど分からなくなって、苦しくなる。それで先輩の方々のところへお訪ねをしたり、友人に聞いたりしたのですけれどもさっぱりわからんのですね。

そして、ひとりの先輩のところへ訪ねましたらこう言われました。「どう聞くのか、聞いてどうなるのか、それは他人に聞いてもはじまらんよ」と。「他人の答えを自分のものとして聞いても、それは何んもしっくりこないよ」と。「肝心なことは何を聞くのか、どう聞くのか、その問いを起こしたのは一体誰なんや」ということを言われました。

「なぜお前は教えを聞こうとしているのだろうか。何を聞こうとしているのか、どう聞くのか、その問いを起こしたのは一体誰なのですか」と逆に言われましてハッといたしました。

どう聞けばいいのか、何を聞けばいいのかという問いを起こしたのは私自身なのですよ。つまり私自身が苦しみの中から聞いていくことしかできないということです。他人の話を聞いて、それで分かるのではなくて、問いを起こしたのは私自身ですから、この苦しいところから聞いていきなさいということです。「私自身」、「自分自身」といいますけれども、そのことが私たちは本当にはっきりしているのだろうか。

例えば経典に『仏説無量寿経』、『仏説観無量寿経』、『仏説阿弥陀経』という「浄土三部経」と呼ばれるお経さまがあります。そのお経の冒頭には「我聞如是」あるいは「如是我聞」と「聞」という言葉がでてきます。『正信偈』の中にも「重誓妙声聞十方」、「聞信如来弘誓願」とありますように、親鸞聖人という方はこの「聞」という言葉をとても大切にされた方だと思います。

先程申しました「浄土三部経」というこれらの経典は、お釈迦様が説いた経典ではなく、お釈迦様が苦しみながら語られた言葉をお弟子の方々が「私にはこういうふうに聞こえてまいりました」と、聞こえてきたところをお弟子の方々が、お釈迦様が亡くなった後に集まって作られたのです。だから経典というのはお釈迦様が説いた言葉ではなくて、聞いた側の言葉です。経典とは、聞いた人の言葉です。説いた人の言葉ではなくて、「私にはお釈迦様の言葉がこういうふうに響いてまいりました、聞こえてまいりました」という聞いた人の言葉、それが経典というものです。

『大経』（『仏説無量寿経』）の中でお釈迦様が一番苦悩した箇所があります。お釈迦様が苦しみ悩まれたこと、それを阿難というお方は「こういうふうに聞こえてまいりました」と言って表された言葉が「老病死を見て、世の非常を悟る」（真宗聖典三頁）という言葉が『大経』の中にでてまいります。「老病死を見て、世の非常を悟る」と。これが

お釈迦様の出家の動機だといわれていわれております。王子の位を捨て、家族、子供を捨て、いずれは国王になる地位を捨て、財産、権利、権力もすべて捨ていった。その大きな動機となるのが、この老病死を見たということです。そしてお釈迦様もこの苦しみを持ちながら歩まれた。

お釈迦様は、今からもう二千五百年前にインドで誕生された方です。現に私たちは、そのお姿も言葉も生で聞くことはできません。もしできるならば、インドの仏跡を訪ねるぐらいしかない。実際に二千五百年前のお釈迦様と私たちは会うことはできません。しかし、その会うことができないお釈迦様と平成二十三年のここにいる私たちが、共通する苦しみを持っているのです。環境も違い、時代も違うけれども、私たちと共通の認識で、この老病死を見ておるわけでしょう。これは紛れも無いことです。私も二つの眼（まなこ）で、この肌感覚で老病死を見ております。そうすると、この老病死については、お釈迦様と現代を生きている私にとっては、ひとつの事柄です。

ひとつの事柄として老病死を見ているのですけれども、現代を生きている私たちとお釈迦様の決定的な違いはここです。お釈迦様は、苦しみの中から世の非常を悟ったというのですよ。私たちも老病死を毎日見ております。我が身の老いていく姿を見ているし、自分が病になる姿を見ているし、いずれ死んでいかなければならない身であるということも分かっている。そして家族の老い、友人の老い、家族の病、友人の病、多くの人の病を見ていて、それを通しながら今日まで数多くの死に遭い、死を看取ってきたというものを持っています。そうすると私たちもお釈迦様も老病死は見たのですよ。じゃあ私は老病死を見て、さて私たちは、そこから何を学び、何を感じ取り、何を受け取っているのでしょうか。

ただ具体的に死というものをみるならば、身近な人、愛しい人、大切な人の死を看取って号泣し、崩れ果てていた、ただそれだけではないはずです。悲しみに遭い、ただ泣いただけではないはずです。私たちは人の死というものと向き合い、何を自分のものに取り入れてきたのだろうか。それを訪ねることが、あとに残る者のひとつの大きな役割ではないでしょうか。

日本の言葉に「息を引き取りました」という素敵な言葉があります。これ素敵な言葉なのです。でも現代の私たちは、素敵な言葉だと捉えません。息を引き取りましたと聞けば、「ああ臨終かな」、「亡くなったのかな」と、こういう受け止め方です。しかしこの言葉は日本語として素敵な言葉なのです。「えっ、どこが素敵なのだろうか？」。素敵なのですね、これが。「引き取りました」というこです。「引き取りました」というのは何かというと、受け取りましたということです。または受け継ぎましたということです。それでは何を？当然ここにある息です。息というのは、これは最期の息です。「あなたの最期の息を受け取りました、受け継ぎました」。最期の息を受け取ったということは、何を言いたいのか。

私たち一人ひとりは、死にたくないのです。正直死にたくないです。どこまでも生き続けたいのです。生き続けたい思いはあっても、息を引き取っていかなければならない。その生きたい、生きたいと意欲を持ちながら人は亡くなっていきます。その「息を受け継ぐ、受け取りました」というのは何かというと、「あなたの生きたいと思っていた意欲、また志半ばにした願い、志をあとに残る私はちゃんと受け取りました、受け継いで歩んでいきます」ということです。あなたの最後の息だけでなくて、あなたが歩もうとした願い、志はちゃんと私があとを引き受けていきます、継いでいきます。これがあとに残る私たちの務め、役割です。

そうしますと、今日まで多くの方、特に家族の別れの中で、ちゃんと先に亡くなった方の志を持ちながら、一日一日歩んでおられますか？悲しみだけでないのですよ。受け取ったものがあるのですよ、私たちには。受け取ったものを大切に、大切にしながら、「あなたは亡くなったけれども、あなたの志や願いは、ちゃんと自分のあり様（よう）、暮らし方あるいは生き方のうえで反映いたしますよ、守りますよ」、それが息を引き取るとい

うことです。だからこれは、素敵な言葉なのです。

つまり、私たち一人ひとりには気づかないかもしれないけども、臨終に立ち会ったということはまさに「な～んも心配いらん、あとはあんたの代わりに引き受けたのだから。あとは私がちゃんと引き受けて、あなたの願い、志を私の歩みとして歩んでいきますよ」ということです。だから別れということではないのですよ。バトンを受けましたというのです。それがあとに残る私たちのお仕事です。そのお仕事を受取るのが私たちです。その中にありながら老病死を見て何をしておったのでしょうか。ただ悲しいと号泣した、それだけではないのです。感じながらも、感じとることを忘れていたかもしれないけれども、ちゃんと受け取ったものが私の中にあるのです。受け継いだものもちゃんとあるのです。その一つひとつを自分の今の生活の中で反映させていく、それが大切な事柄でしょう。

それで釈尊です。「世の非常を悟る」と。「世の非常を悟る」とは何を表すか。例えば大きな公共施設やスーパーへ行きますと、緑色に白で人間を形どった、非常口を表すものが大きな建物には必ずあります。公共施設やスーパーで火災が起こって煙が充満し、電気も全部消えた時に、三十分間はこの非常灯が点きます。そのことによって私たちは、外へ逃げていくことができます。そうすると、この非常というのは、大変なことが起こったということです。一大事が起こりましたということです。誰の上に？私の上にです。私の身に大変なことが起こりましたということなのです。老病死を見たということは、一大事が私の身に起こりましたと。ところが現代の私たちは、老病死を見ても別に大変な事柄ではないし、一大事だと思っていません。ただ別れがつらかったなあ、と。

じゃあ、現代の私たちは、なぜ一大事として、大変な事柄として受け止められなくなってきたのか？それは老病死というものを、嫌なものだと受け止めているからです。自分にとって老いていくことは嫌なこと。病になることは嫌なこと。ましてここに生きている私が死んでいくことなど嫌なこと。嫌なことですからどうしたいか。この三つから逃げたいのです。この逃げたいということが私たちの中にあります。それを時代や社会は敏感に感じ取ります。感じ取るから、皆さんもきっと電話していると思います。0120に。「膝が痛いのです」、「腰が痛いのです」、苦しいです、嫌ですね。そうしたら昨日ですと新聞の一面半分のところにある有名な七十八歳の方が、「六十歳で目標を持ってがんばらなきゃいかん」といって健康サプリメントのコマーシャルをしておるはずです。老いというものに対して「これを飲むと楽になりましたよ」といってテレビ、新聞、様々なところでコマーシャルします。それが0120です。

それで私たちも、ついつい「そうかなあ」と思って、かけているはずです。三度三度の食事の合間のどこかで健康サプリメントをみんな飲んでいるはずです。それはなぜか。逃げたいからですよ。老いていくのが嫌だから。だから時代や社会は、私たちの気持ちをちゃんと先に察知していますよ。すごいですね、企業というのは。ちゃんと考えてくれているのですよ。だから病気というものについても、ちゃんと時代や社会が敏感に感じていますから厚生労働省をはじめ様々なところで「病気にならないでください」、「特に生活習慣病にならないでください」と特に男性の方々に注意を勧告しています。「タバコをやめたらどうですか」、「お酒を少し減らしたらどうですか」、「食事制限して、運動されたらどうですか」とちゃんと勧告するでしょう。そして保健所から健康診断の案内まで来ています。ちゃんと心配してくれているのですよ。国、地方自治体、お医者さん、企業までが併せて私たちをちゃんと心配してくれている。それはなぜかというと、逃げたいという心があるからです。

そして死というものをどういうふうに現代は見ているかというと、悲しいかなや二つに分けています。「生は生」、「死は死」という二つに分断して見ています。死というのはいつ来るのかといえば、これは最期の息

を引き取る時、つまり遠い遠い遠い先に置いているはずです。今の自分はここにおっても、死は遠い先。その先にあるのが死だというふうに思っています。いつの間にか生と死というものを二つに分けて、「生は生」、「死は死」、そして生のみを大事にします。生を優先する、生を満喫するような文化を私たちは、今私も含めて満喫しております。死を遠い彼方に置いてしまった。これが現代人の私たちです。すべて老病死から逃げたいということです。逃げたいために何をしたか。外の道を求めているのです。老病死から逃れる道を私たちは求め続けているわけです。

それでは、「私はこういうふうに聞いた」というお弟子さん方は、釈尊から一体何を聞いたのでしょうか。お釈迦様から阿難尊者（あなんそんじゃ）は、舎利弗（しゃりほ）は、何を聞いたのでしょうか。そうすると、ここで釈尊という方が、老病死という苦しみ悩み悲しみの中から何を感じ、何を語ったのかです。この老病死というものを釈尊は、五劫思惟（ごこうしゆい）とありますように、長い時間思案し思考したのでしょう。自問自答したわけでしょう。ずっと座り込んで自分の中で、問いに対して真摯に丁寧にその問題と向き合った。

そうするとひとつ見えてきた。根っこが見えたということです。老病死を生み出す根っこがあるのです。その根っこは何かというと、「生」ということです。生まれたということです。私たちが老病死から逃げたいのならば、たったひとつ方法があります。間違いなく逃れます。私も皆さんも。それは、生まれてこなければよかったのです。生まれてこなければ、老にも病にも死にも遭う必要がないのです。生まれたから老病死があるのです。生まれなかったら遭う必要がないのです。しかし生まれてしもうたんです、ここに。

ということは、この生というものは、ただ生ではないということです。何があるのか。この生の中には老も病も死も包まれておるということです。いつから？悲しいかなや生まれた瞬間からです。私がこの地上に生まれた瞬間のおいのちの中に、老病死するおいのちがあるということです。これが生なのですよ。生とは別にどこかに老病死があるのではなくて、生老病死はひとつなのですよ。ひとつの事柄としていつから？生まれた瞬間からですよ。私がこの地上に産み落とされた瞬間から私の体の中に、老病死するおいのちとしての生というおいのちが併有しているのです。それが私やということです。その私が今ここに生きつつある今は、死につつある今なのです。死につつある今を、生きつつある今として生きているのです。

そうすると釈尊が、この生老病死をひとつの事柄として見えた時、何が見えたか？もうすでに死んでもいい私が今ここに何と生きている。もうすでに命を終えてもいい、今日の朝、ここへ来る数分前にもう死んでもいい事実の中に今こうして生きている。だからこれが大きな問題なのです。死の問題ではないのです。生きていること、生き続けていることが大変なことやということです。ここに感動がありますかということです。「ああっ」という驚きです。ここにいること自体がもう大変なことやったということです。昨晩に息を引き取ってもおかしくない、朝布団の中で亡くなっていてもおかしくない私が、今ここにあるということです。そしてここにおるけれども、その事実は生老病死するおいのちを持っているのです。だからこの本堂でいま息絶えてもおかしくないのです。そのおいのちを今生きていながら、私たちは老病死を見て外へ逃げたいなと思っているのです。

お釈迦様は外の道を説いたのではなくて、内の道を説いたのです。「この生というものを訪ねていきませんか」と。この一瞬一瞬のおいのち、それは「生きつつある今は、死につつある今ですよ」と。死につつある今を、生きつつある今として生きている現実です。その生を大事にしなければならん。ところが現代の私たちは、そんなことを忘れてしまった。忘れてしまったということは、何を忘れているか。自分自身の在り方を忘れてしまったということです。大切な楽しい人生を見過ごしたのではなくて、自分の存在を忘れてしまっ

たのです。いつまでも生きられると思っておるのです。でも命の事実はそうではない。いつまでも生きられると思うこと自体が余裕と油断やということです。逆に今しかありませんよ、と。ここに生き続けてきたあなたは、亡き方から大切な事柄を受け取っているはずですよ、と。その生をあなたは喜びをもって、自分自身輝かせていますか、ということです。その生と向き合わなければならない。このことを経典の中の仏弟子の方々が、「苦悩の中からこういうことを教えられました」、「私たちはこういうふうに聞きました」と。そこで改めて、なぜ私たちはここで教えを聞くのだろうか。聞かなければならないのは、なぜか？それは人間に生まれてきたからですよ。

私もこの聞くということで悩んだ時のことです。道因寺の毎月のお参りに足を運んでくれた大先輩のおばあちゃんがいるんですね。もう九十も回っておりますけれども、今でもご健在です。そのおばあちゃんに聞いたことがあるのです。「私、聞いても、聞いてもわからんのやけども、どうしたらいいんか」と聞いたら、おばあちゃんは即答しました。「そんなことわからんのか」と。「うん、わからんのや」と。「人間やからや」と言うのです。「人間やから聞くんやがいね」と。そんなわかる、わからんのもんじゃないんや、人間やから聞かないかんのやと。「はぁ～」と思いましたね。流石人生の先輩やなと。ちゃんとそういうふうにして人間だから聞かなければいかんならんというものを感じ取るのですよ。その感じ取っている証が、まさに生きている証です。

だから単に私たちは生老病死、四苦という言葉を知っていて、老病死も全部漢字で書けると思っておるけれども、いくら書けたとしても頷けんのですよ。だから今ここにおられる皆さんも私の話を聞いているはずですけど、頷けないはずです。頷けん証拠があります。ここで今、命を終えてもいいと思う人、ちょっと手を挙げてください。手が挙がらないということは、死にとうないということです。ここで死にとうない。事実はこうだけど、思いはこの浄光寺の本堂では死にとうない。這うてでも家へ行きたいはずです。つまり私たちの中にあるのは、どこまでたっても自分の思いしかないということです。自分の思いでしか聞けないのです。

ところが親鸞聖人はこう言いました。「この自分の思いが破られる時が必ずきますよ。それが目覚めです」と。「自分の思いで生きてきたことが、よきひとと遇うことによってはじめて思いが破られました」と。だからそれを後にお弟子の唯円という方が『歎異抄』に親鸞聖人の言葉をかき集めました。あの唯円という方もすごいですね。何がすごいかというと、何と唯円は親鸞聖人が亡くなってから二十年後に『歎異抄』を書いたのですよ。皆さんは二十年前に出会った人の言葉を憶えてますか？私は憶えてません。でも唯円という方はちゃんと耳の底に残したというのです。それは百分の一にも満たないけども、在世の頃、聖人はこういうふうに語られましたと、耳の底に残っている言葉を呼び起こして書いたのが『歎異抄』ですよ。その『歎異抄』の中に親鸞はこう言いましたと。自分の思いが破られて、その破られた時にひとつの世界が見えてきますよ。どんな時？「念仏もうさんとおもいたつこころのおこるとき」（真宗聖典六二六頁）です。「念仏もうさんとおもいたつこころのおこるとき」はじめて頷けますよ、と。必ず時が来るのです。自分の思いだけで生きていますが、その思いが破られる時が必ずあります。それを人間だと親鸞は教えています。だから私たちにも時が来るのです。その時を聞いていかなければならない。

でも私たちは悲しいのです。頷けないという悲しさを持っています。悲しい存在です。でも親鸞聖人あるいはお釈迦様、仏さまはこれを怒っているわけではないのです。話はわかるけれどもなかなか頷けない、それを怒っていないのです。「悲しい存在ですよね」と。「だからこそ聞いてくださいね」というのです。「迷える衆生よ、孤独を抱え、苦しみ悩み悲しみを抱えている者よ。命終わらんとする者よ、念仏申してくれよ」というのです。悲しい存在として認め

てくれているのですよ。私たち一人ひとりを悲しい存在として「その事実の中で生きるということは辛いことやなぁ、でもしっかり悔い無く生きてくれよ」と。それが仏さま、親鸞聖人から私たちへの促しです。

私たちの生老病死というひとつのおいのちが今ここにある。それが私自身の一大事やということです。聞くことはまさに私自身の一大事なのですよ。大変なことに出遇うていくということですよ。聞けば立派なものになるとか、聞いて分かるというのではないのです。聞くことによってはじめて自分自身というものが明らかになりますよ、と。自分の本当の姿が見えてまいりますよ、と。そこから改めて一大事を感じながら、また聞いて、聞いて、聞いていきましょう、と。だから聞くことに尽きるのです。教えを聞いて、仏教の言葉を憶えて、了解して仏道が開くのではありません。聞くことによって、もうすでに道は開かれているのです。聞くことで道が開かれるのです。その一番のきっかけはこの生老病死ですよ。肝心要のことを私たちは、忘れ果てているのです。自分がどういうおいのちをいただいてここにおるかということを平生から忘れ果てている。逃げることばかりを目にしていた私。それに対してお釈迦様は、逃げるのではありませんよ、と。逃げるのではなくてまさにその事実の中に今生きているということを、自分の中でその生というものと真向きになりなさい、と。その生から様々な問題が見えてくるはずです。

時代の問題、家庭の問題、個人の問題、様々な問題がこの生ということから見えてまいります。現代の問題なら、みんな苦しみ悩み悲しみを持ちながら生きている世界中の人々、いのちあるものが見えてくるはずです。日本でいうならば東日本大震災、原発事故によって、放射能によって汚染された子供たち大人たち、土地、生き物、みんな生きています。生を持っています。そういう事実が見えてくるはずです。

そうするとそこに何がもう一つ見えてくるか？ひとは命があるから尊いのではありませんということです。老いも若きも男性も女性も命があるから尊い存在というのではないのです。何で尊いのか？この生老病死するおいのちの中で、毎日、毎日必死になって悪戦苦闘しながら、苦しみ悩み悲しみを持ちながら、生き続けているから尊いのです。ただ命があるから尊いのではないのです。みんなこの事実の中で必死になっているというわけです。皆さんもそうでしょう。生きていくために必死になっているはずです。東日本大震災、あるいは長野県の栄村大震災、阪神大震災、様々なところで世界中の生きとし生けるものは、悲しみ苦しみ悩みを持っているのです。だから人間存在は尊いのです。命があるからだけではないのです。一人ひとりがこの生老病死するおいのちの中に苦しみ悩み悲しみを持ちながら、その一日一日を大切に悪戦苦闘しながら、もがきながら、へたり込みながらでも生き続けている姿、そこに改めて尊さを感じていくのですね。今、小さなお子さんも入ってまいりましたけれども、小さなお子さんも一緒です。そういう事実の中に一人ひとりが輝いていく、それをまさに大経の中で「生老病死を見て世の非常を悟る」と、この言葉で私たち人間自身のいのちの有り様、まさにひとりの人間が苦しみ悩み悲しみした中で語られた言葉、それが聞いた人の言葉として現に私たちに伝えられている。そして、その聞いた者が、先に書きましたように「息を引き取りました」と受け取って、受け継いでいるのですよ。そのことをもう一度自分の中で確認をしながら、自分がどう人間として生きるのか。生きるとは何か、なぜ生きなければならないのか、その原点を教えに聞いていく。それが親鸞という方が大切にされた「聞」という中身ではないかと思います。どうも二日間にわたり有り難うございました。

《へんしゅうこうき》

◇平成二十三年十月十八日、浄光寺報恩講の法話録でございます。

◇雪華は凡てを包み込むとともに休息（くそく）せんとす衆生にもう一つの眼を育む。もう春がおたいしさんを呼んでいます。さあ応える季がきました！

「お太子さん」（聖徳太子御忌）
・日時　三月二十日 午後一時
・法話　大谷大学前学長　木村宣彰 師